

## CONTENTS

- ・スペインに旅して  
～フラメンコは、怒りの踊り～
- ・たくさんのお出合いに感謝

Muraguchi Kiyomuraguchi Women's Clinic

## フラメンコは、怒りの踊り

坂総合病院名誉院長 村口至 先生



砂かぶりの客席から見上げる奥が浅い舞台。大柄の踊り子が衣をすれ違いながら激しく腰を揺する。両腕を大きく舞い上げる。蹴り上げられたスカートがひらめく。憎しみを叩きつける如き床のきしみ。蹴りつけられる床の悲鳴。強烈なリズムが続く。表情は苦渋に歪んでいる。汗が飛び散ってくる感じだ。

この烈しさは、情熱はどこから来るのだろうか。店の案内のリーフレットには、フラメンコの由来は農民や炭鉱夫にあるとあった。スペインの長い歴史にあって、その下支えをして

いた農民（農奴）や炭鉱夫などの下積み階級の苦悩、悲しみそして怒りの表現としてとらえた時に、その烈しさに強く共感できた。スペインの歴史はダイナミックだ。北方の民族の移入、イスラムの支配、カトリックによる世界制覇そして無敵艦隊の敗北、第2次世界大戦に引き続くフランコ独裁との市民戦争。今でも自治州の独立国家の動きがニュースとして時折にぎわしている。第2の都市のバルセロナでも、カタルーニャの旗がはためきカタルーニャ語で教育されているという。12の各州は自治州として、それぞれ政府を持っている。

5月の大型連休に、喜代所長とバルセロナ、マドリードを訪ねた。自由時間を確保したくて大型ツアーを避け、いくつかの名所訪問は、国内の旅行業者の小企画に乗り事前申し込みでうまくいった。

私のスペイン現代史に関する知識は、独裁者フランコ大統領と市民がたたかった市民戦争についてのわずかな知識だ。最初は、『誰がために鐘は鳴る』（ヘミングウェイ）であった。国際的連帯で銃を持って戦った男女の愛を描いた感動的なものだった。又、この闘いに参加したノーマン・ベチューン（カナダの医師）が、戦場で初めて輸血治療を実施した（『医師ベチューン』）。この医師は、その後日本の中国侵略軍と戦う中国共産党解放軍に参加し戦場医学を普及し、戦場で命を落としている。また、『ドン・キホーテ』（岩波文庫）は、随分前から読み始めたが読み切れず、そのうちトイレ文庫になったまま放置していた。これを通読するなど準備したが、その複雑な歴史はなかなか頭に入りきれなかった。しかし、トレド行きのツアーのガイド女史のスペイン概略史は、ダジャレも含めてわかり易かった。スペイン在留28年目という。

## スペイン旅の期待

これらのわずかな予備知識であったが、旅の目的として2つを置いた。1つ目：ドン・キホーテとその旅の連れサンチョパンサのミニ像を確保すること。2つ目：偉大な芸術家—ピカソ、ミロ、エル・グレコそしてガウディ（建築家）を生み出した文化に触れ何を感じ取るか。1つ目は、バルセロナ、マドリードの店にいろいろあったが満足できなかった。それがトレドでは、さすが作者サンチョパンサの出身地であるからか、いどりみどりという感じであった。それでも、なかなか満足できるものと会えず、悶々として帰りの鉄道（新幹線でMadridまで直通、1時間）に乗るべくちらりとキオスクに入ったところ、あるではないか！ これぞ目指したものだ！！ 大枚55ユーロで買ったのでした（右写真）。

2つ目の目的では、ピカソ美術館（Barcelona）を見てからソフィア王妃美術館（Madrid）を訪ねたため、ピカソの子ども時代の具象からフォービズムに発展してゆく経過をたどることが出来、その苦悩の進展を味わえた。ただ、青の時代が抜けていたのが惜しまれた。〈ゲルニカ〉は、何度も書き直された経過が分かり、ピカソの戦争に対する憎しみの奥深さ、強い憤りを感じ取ることができた。ミロ美術館（Barcelona）は、元オリンピック会場の丘の緑に恵まれたところにあった。何にもとられない自由な、天真爛漫な子供の絵と



裏面に続く

いう以上には感じれとれなかったが、最後に農具を表現した一連の造形物に出会ったときに、ミロの精神性の底に農民の苦しみがあり、そこからの解放を表現しようとしたのではないかと、思うようになった。「自由でいいんだよ！」と語りかけられたようだった。エル・グレコは、縦長のでかい宗教画家という事前のイメージで強く惹かれることは無かった。若いころに宮廷画家を志望するも採用されず、宗教画に進んだ由。トレドの大聖堂は、スペインのカトリックの大元締めである由。その正面に鎮座ましましているのは、エル・グレコの最高傑作「オルガス伯の埋葬」である。又有名な「聖衣剥奪」は、隣の聖具室にある。キリスト教に関して何の知識もないものとして、何ともありがたさを感じられないが、“光背”が描かれているのはキリストのみであるという知識は得た。ツアーから離れ翌日にエル・グレコ美術館を訪ねた。ここは、グレコが40年間寄寓していた家主が、広大な庭園とともに整備した美術館であった。グレコの質素な生活ぶりや沢山の小品が展示されていた。主に、人物像であったが、これらを含めてグレコの宗教画を見直すと、生きた人間として宗教画を変革した画家であると捉えなおすことができた。

## ガウディを観た

建築家ガウディによるサグラダ・ファミリアは、人・人・人でいっぱい。予約していたエレベーターは動かず、上から眺められなかった。残念という気がしないのが不思議だった。ホテル真向いの「グエル邸」(ガウディ設計)の屋上に上ってみた。色彩にあふれたとんがり帽子が沢山ある。近づくところには、沢山の切れ込み穴があり、通風孔であることが分かった。なるほど、異形な形も機能性を担保しているのだということだ。屋上から市内を見渡すと、教会の尖頭がいくつも飛び出ている。市街地全体がガウディ作品のようにも見えたのでした。なお、サグラダ・ファミリアはカトリックの一宗教法人の聖堂であるが、2026年の完成を目指しての100年建設計画であるという。近年は、世界中から見学者が訪れるためその入場料で建設資金を得ている由。スペインの歴史は、カトリック、イスラム、ユダヤの宗教と文化それぞれの闘いや葛藤や受容の歴史が今日を作っていること。それが「公的(公共性)」の広さと深みと豊かさを作っていると感じました。

## スペインからのメッセージ

「もっと自由でいいのだ!」「創造力を働かせよ!!!」「己の解放のためにがんばれ!!!」「人間はずばらしい」

## たくさんの出会いに感謝 ～きよくりでの学びを忘れずに～ 看護主任 小林美和子

私がクリニックに来てからもう少して7年を迎えるはずでしたが、夫の転勤に伴いこのたび退職することになりました。小学2年生だった長男は、中学3年になり、1歳だった次男は、小学2年生になりこの年月の重みを感じます。この7年間で振り返りクリニックとの出会いを思い出しました。村口きよ女性クリニックのホームページを見て「女性に優しく、女性が元気になるクリニック」を掲げて頑張っておられる事にとても魅力を感じたのを、今でも覚えています。クリニックで働き始めてからは、いろいろな事を学び経験させていただきました。

初めて耳にしたジェンダーやリプロダクティブ・ヘルス/ライツ「性と生殖に関する健康と権利」、二泊三日で行った思春期セミナーでの貴重な体験、日々新鮮さを感じていました。このクリニックでの約7年間で私は、沢山の出会いがありました。うれしい事も、悲しい事もありましたがすべて、大切な経験となり自信にもつながっています。当院には、悩みをかかえ来院される方も少なくありません。悩みは人それぞれ違い、時間が限られる中で、できるだけ耳を傾ける事を心がけて来ましたが、時には、力不足を感じる事も多々ありました。これからも「患者様の言葉に耳を傾ける」この事は、大切にしていきたいと思えます。

最後になりますが、ここを離れても「女性に優しく女性が元気になる」ように、お手伝いができるよう心がけていきたいと思えます。喜代先生をはじめ先生方、支えてくださったスタッフの方々には、感謝の気持ちでいっぱいです。大変お世話になりました。



### 臨時休診

- 8月14日(月)～15日(火)は、お盆休みとなります。
- 8月25日(金)～26日(土)は、第36回日本思春期学会参加のため休診となりますのでご了承ください。

発行元：村口きよ女性クリニック  
<http://www.muraguchikiyo-wclinic.or.jp>  
 e-mail: con@muraguchikiyo-wclinic.or.jp

